

山梨県笛吹市

中原・白戸遺跡

— 県営畠地帯総合整備事業寺尾地区発掘調査報告書 —

2008

山梨県峡東農務事務所

笛吹市教育委員会

序

笛吹市は平成16年10月に、石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、春日居町が合併し、さらに平成18年8月に芦川村が加わって誕生しました。この笛吹市は甲府盆地の南東縁に位置し、原始から古代・中世にかけての多くの遺跡が存在し、山梨県内でも有数の埋蔵文化財の宝庫として知られています。したがって、様々な基盤整備事業に伴って各地で発掘調査が実施されています。

また、笛吹市はモモ・ブドウの生産量が日本一であるなど果樹栽培が盛んな地域であり、今回調査の原因となった県営畠地帯総合整備事業も、文字通り境川町寺尾地区の農業に大きな役割を果たすことを期待しております。

さて、この地域には、甲斐国と駿河国を結ぶ中道往還があり、古くから交通の要衝であり、各時代の遺跡や寺社が存在していた場所でもあります。

本報告書は、境川村教育委員会が調査しました中原遺跡と、笛吹市教育委員会が調査した白戸遺跡の2遺跡の調査成果を所収しており、比較的発掘調査が少ない寺尾地区の生活痕跡を明らかにすることことができたと思っております。

末筆ながら、調査実施にあたりご協力いただいた関係機関並びに関係者各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

本報告書が、寺尾地区の歴史を知る資料として活用されることを、期待します。

平成20年2月

笛吹市教育委員会

教育長 山田武人

例　　言

1. 本書は山梨県笛吹市境川町寺尾地内に所在する中原遺跡と白戸遺跡に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は原菅畠地帯総合整備事業（担い手支援型）に伴うもので、境川村教育委員会及び笛吹市教育委員会が、現在の山梨県東農務事務所から委託されて実施した。調査費用は平成16年に関しては、文化庁・山梨県の文化財補助事業で対応し、それ以外は事業者負担によるものである。
3. 発掘調査は平成13・14・16年に実施した。調査体制は下記の通りである。
4. 整理・報告書作成作業は平成19年度に実施した。調査の遺物や記録類は笛吹市教育委員会が保管している。
5. 本書の執筆・編集は野崎がおこなった。
6. 本書に使用した地図は、境川村役場発行の「都市計画基本図」を加筆・加工して作成した。
7. 発掘調査から報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げるしだいである。

小林 健一　中山 誠一　平野 修　山梨県教育委員会学術文化財課　　(敬称略)

〈調査体制〉

平成14年

調査機関	境川村教育委員会						
教育長	大須賀太郎						
教育課長	角田 正人						
調査担当	野崎 進						
調査作業員	雨宮 ゆり	大久保房子	岡 尚恵	久保田明義	原 裕子	宮川 菊江	

平成16年度

調査機関	笛吹市教育委員会						
教育長	芦原 正純						
社会教育課長	田中 勤・						
調査担当	野崎 進						
調査作業員	雨宮 ゆり	宮川 菊江					

平成19年度

教育長	芦原 正純（～6月）						
	山田 武人（7月～）						
文化財課長	小川 勝明						
調査担当	野崎 進						
整理作業員	雨宮 ゆり	宮川 菊江					

凡 例

1. 遺構については、以下のような記号を使用した。

住居跡-SI 方形周溝墓-SH

2. 遺構・遺物図版の縮尺は、下記の通りである。

住居跡・方形周溝墓-1/60 土器-1/4 土器片・石器-1/3

3. 遺構図版中の方位は磁北、地図は国家座標（旧日本測地系）を示し、標高は海拔高で表している。

4. 石材については、『標準原色図鑑全集6 岩石鉱物』保育社を参照した。

5. 住居跡の図版中に、床面（確認面）からのピットの深さ（単位cm）を記した。

6. 遺構図版の土層図中のIはローム、Bはブロック、HLはハードローム、Cはカーボンを表す。

上層観察表の縦りや混入物の記号は、次の通りである。

縦り ○非常に縦りあり ○縦りあり △やや縦りに欠ける

混入物 ○多量に含む ○含む △少量含む □微量含む

7. 土器観察表の胎土は次の通りである。

赤：赤色粒子（スコリア等）、白：白色粒子（長石・石英等）、金：金雲母、雲：雲母

黒：黒色粒子（角閃石等）

目 次

序 文

例 言

凡 例

I. 序章

1. 調査による経緯と調査経過..... 1

2. 地理・歴史的環境と周辺の遺跡..... 1

II. 中原遺跡..... 4

III. 白戸遺跡..... 7

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査位置と周辺の遺跡.....	2	第5図 S H 1 実測図.....	9
第2図 中原遺跡調査区位置図.....	5	第6図 S H 1 土器個体別分布図.....	10
第3図 S I 1 実測図.....	6	第7図 出土遺物(1).....	11
第4図 白戸遺跡調査区位置図.....	8	第8図 出土遺物(2).....	12

表 目 次

第1表 土器観察表..... 13

写 真 目 次

P L 1 中原遺跡、白戸遺跡遺構写真

P L 2 白戸遺跡出土遺物

I. 序 章

1. 調査に至る経緯と調査経過

県営畠地帯総合整備事業（狙い手支援型）寺尾地区は、山梨県峠東土地改良事務所（当時）が事業主体者となり、幹線道路1、支線道路6、排水路3、農作業準備休憩施設の整備事業を計画し、先行したのは幹線道路である。支線道路に関しては、受益者との調整で路線が変更になることが少なくなく、隨時照会が行われた。

幹線道路は幅7m、長さ約1,500mであるが、事業計画の段階で境川村教育委員会に照会があり、周知の埋蔵文化財の包蔵地として、寺尾・中原遺跡のみが該当すると回答していた。平成13年度になり、山梨県峠東地域振興局農務部（当時）より寺尾・中原遺跡内の買収の見通しがたったため、村教育委員会に試掘調査の依頼があった。それを受け、平成14年2月7日に試掘調査（重機によるトレーニング掘削）を実施したところ、平安時代と思われる住居跡を確認した。これを受け、農繁期が過ぎた平成14年9月18日～21日に住居跡を確認したのはほぼ全面となる242m²の本調査と、昨年度立木の関係で試掘調査を実施できなかった箇所を含めて調査を実施し、住居跡1軒、土坑5基を確認した。これをもって、幹線道路の発掘調査は終了した。

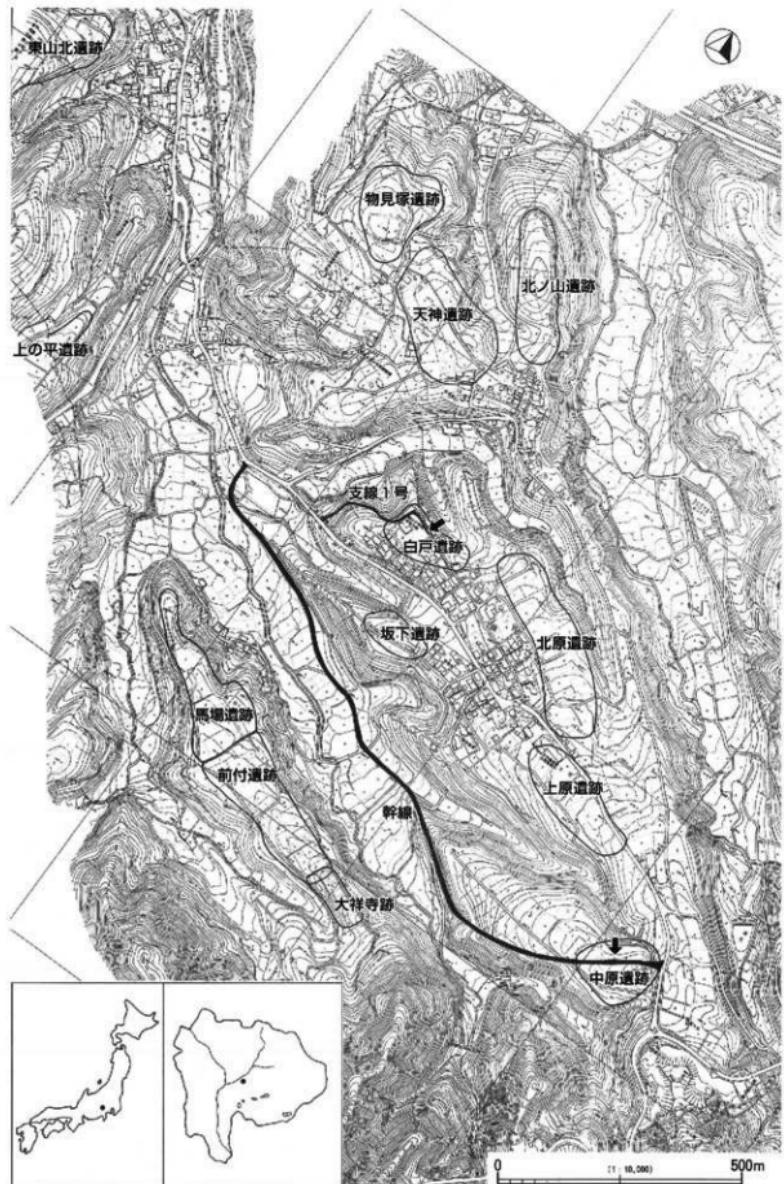
平成16年度に入り、支線道路第1号（延長280m、幅4m）の工事が予定され、一部で周知の包蔵地である白戸遺跡にかかるため、村教育委員会に照会があった。工事に先立ち試掘調査に着手したのは、11月に入ってからのことであった。調査に入る直前の10月12日には、東八代郡石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村、東山梨郡春日居町の6町村が合併し、笛吹市が発足したため、笛吹市教育委員会が試掘調査を担当した。10月22日～11月1日まで、45m²を試掘調査し、3mの既設道路の拡幅箇所で、調査区を横断する溝状遺構の一部を確認・調査し、終了した。

平成19年度に入り、ほぼ他の路線が確定し今後発掘調査が不要である見通しがついたため、整理作業を断続的に行い、報告書の刊行に至っている。

2. 地理・歴史的環境と周辺の遺跡

山梨県笛吹市は、甲府盆地の中央部やや東寄りに位置し、平成16年10月12日に東八代郡の右和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村と東山梨郡の春日居町の合併により笛吹市が発足し、平成18年8月1日に東八代郡芦川村が編入したものである。境川町は市内の西端に当り、今回の調査地区である寺尾地区は、さらに西端に位置し、旧中道町が合併した甲府市との市境に位置している。この市境付近には、通称精進湖線と呼ばれる国道358号線が通り、ほぼこの国道に沿って駿河国（静岡県）と甲府盆地を結ぶ主要道であった中道往還があり、この中道往還の甲府盆地の入口部に位置しているのが、甲斐風土記の丘である。この一帯には弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝墓が130基以上確認されているのを始め、甲斐国最大で墳丘長169mの桃子塚古墳などが、中道往還の西側に展開している。一方、今回の調査地点はこの中道往還の東側に当り、当該期の遺跡の在り方が注目される地域である。

寺尾・中原遺跡と白戸遺跡が所在する境川町寺尾地区には、間門川が流れしており、その本支流に



第1図 調査位置と周辺の遺跡

より簡析され、微視的には平坦面が点在しており、概ねその平坦面に遺跡が周知されている。しかし、巨視的には境川町坊ヶ峯から市川三郷町まで東西約十数kmに亘る曾根丘陵上に立地している。

周辺の遺跡では、物見塚遺跡で昭和59年に、天神遺跡では平成2・10年に、北原遺跡で平成10年にそれぞれ調査を境川村教育委員会が実施し、各々報告書が刊行されているので参照されたい。また、平成19年には、甲府・峡東地域（笛吹市、山梨市、甲州市）の4市によるゴミ処理施設建設に伴う試掘調査を、馬場・前付遺跡、大祥寺跡で実施しており、今後本調査が実施される見込みである。

一般的に曾根丘陵では、丘陵の先端に方形周溝墓や古墳、そして弥生時代後期から古墳時代前期の集落が形成される傾向があり、その意味では北側の中府市（旧中道町）宮下にある朝日遺跡が大規模な集落になるであろうと言えそうである。また、物見塚遺跡ではローム層が確認されたものの、天神遺跡の1次調査では、確認面が真土であったことから、この地域には小規模な集落しか形成され難い環境にあったと、みなすこともできる。これまでの調査でも遺構はさほど集中していないことも、その証左とすることもできよう。

またこの地域では、境川町では珍しい平安時代の遺構が確認されている。古代、甲斐国（山梨県）は、八代郡・山梨郡・巨摩郡・都留郡の4つに分かれており、このうち『和名類聚抄』にある八代郡の五郷のうち、長江郷と白井郷に境川町は属していたとされる。この2つの郷にどの地区が属していたかはっきりしないが、江戸時代の筋や『甲斐國志』などから、寺尾地区は白井郷に属していたと推測されている。現状ではこの地域に平安時代の大規模集落は確認されておらず、丘陵部では本遺跡のように遺構が集中しない散居的な遺跡が多いのかもしれない。

ところで、寺尾という地名は、その名が示す通り寺に由来すると言われている。現在、常泉寺（上寺尾）、金福寺（中寺尾）、竜昌院（問門）が存在するが、いずれも16～17世紀の建立である。ただし、現在中道町上曾根にある竜華院の前身である大祥寺が、寺尾前付にあったと言われている。この大祥寺は弘法大師による開基（806年）で、寺尾地区は門前集落として栄えたと伝えられている。この大祥寺が現在の竜華院の地に改められたのは、暦応元（1338）年である。なお、問門地内の中道往還に現在梵字石が残っているが、これは大祥寺の参道入口を示すと言われている。

この大祥寺跡については、前述のように平成19年度に試掘調査を実施しており、故地とされる場所には近世に建立されたと推定される石碑があり、この周辺から経石が出土しており、本調査が期待される。

また、梵字石をやや南に登った場所に、古宮と呼ばれる箇所がある。詳細ははっきりしないが、知承元年（1177～1181年）に源氏神社と南宮神社の2つの社が建立されたと言われている。そして武田氏滅亡後に、現在の場所に源氏南宮大神社として移築され、武田道信軒筆と言われる屏風が、旧中道町の福慶神社と2箇所に分けられたと言われている。

さらに、この周辺には甲府盆地の縫裂伝説が伝わる式内社と言われる佐久神社や安國寺、日枝神社などが点在し、中道往還の周辺であることを考慮すると、弥生時代後期～古墳時代のみならず、古代においても注目される地域である。

II. 中原遺跡

本遺跡は平成5年度に本調査を実施した仲原遺跡との混同を避けるため、上記する場合は寺尾・中原遺跡と称している。本遺跡ではこれまで調査が実施されておらず、今回が試掘調査を含めて初めての調査である。本遺跡は平坦面の奥に立地しているが、この平坦面の先端では土器の採集ができないため、遺跡は周知されていない。

本遺跡内は畠地となっており、平成9年度の分布調査で繩文時代中期後半の曾利式土器や、平安時代の土器類、須恵器などが、少量採集されている。今回は平成14年2月に試掘調査を実施したところ、平安時代の住居跡状の遺構を確認したため、改めて住居跡を確認した畠のみ、平成14年9月に本調査を実施したものである。調査は遺跡を横断する形となつたが、一部では土砂の漉き取りが実施されているため、試掘調査を実施していない箇所もある。基本的には当該地を含め、本遺跡は上方から土砂の堆積がなされにくい立地であるため、耕作により遺構確認面であるローム層が削平されてしまつており、遺構が確認されないばかりか遺物がまったく出土しない状態であった。

表土の厚さ20~30cmで、遺構確認面は周辺の遺跡と同様のソフトローム層（Ⅲ層）であった。確認した遺構は、住居跡1、土坑6、ビットである。このうち、土坑に関しては覆土の状況から最近のものと思われる。

S I 1 (第3図、PL1)

北壁が残存していないため、規模ははっきりしていないが、東西2.5m、南北は不明であるが少なくとも2.8m以上であり、長方形を呈するものと思われる。確認面からの深さは10cm程と浅く、覆土は暗褐色土で、ローム粒を少量含み、やや締りに欠けていた。床面は貼床が堅密に施され、ハイドロームブロックを多く含む土であった。この貼床が確認できたため、住居跡と判断したものである。住居跡内で確認した2つのビットはいずれも貼床の下で確認したものである。西壁中央が約30cm程突出しているが、これはカマドの残骸であった可能性があるが、それを裏付ける資料は出土していない。また南壁で地山であるローム層の掘り残しが見られたが、段階状の遺構になるのか否かは不明である。この住居跡の周囲にはビットが7つ見つかっている。住居跡の年代は不明であるが、平安時代の所産と想定している。

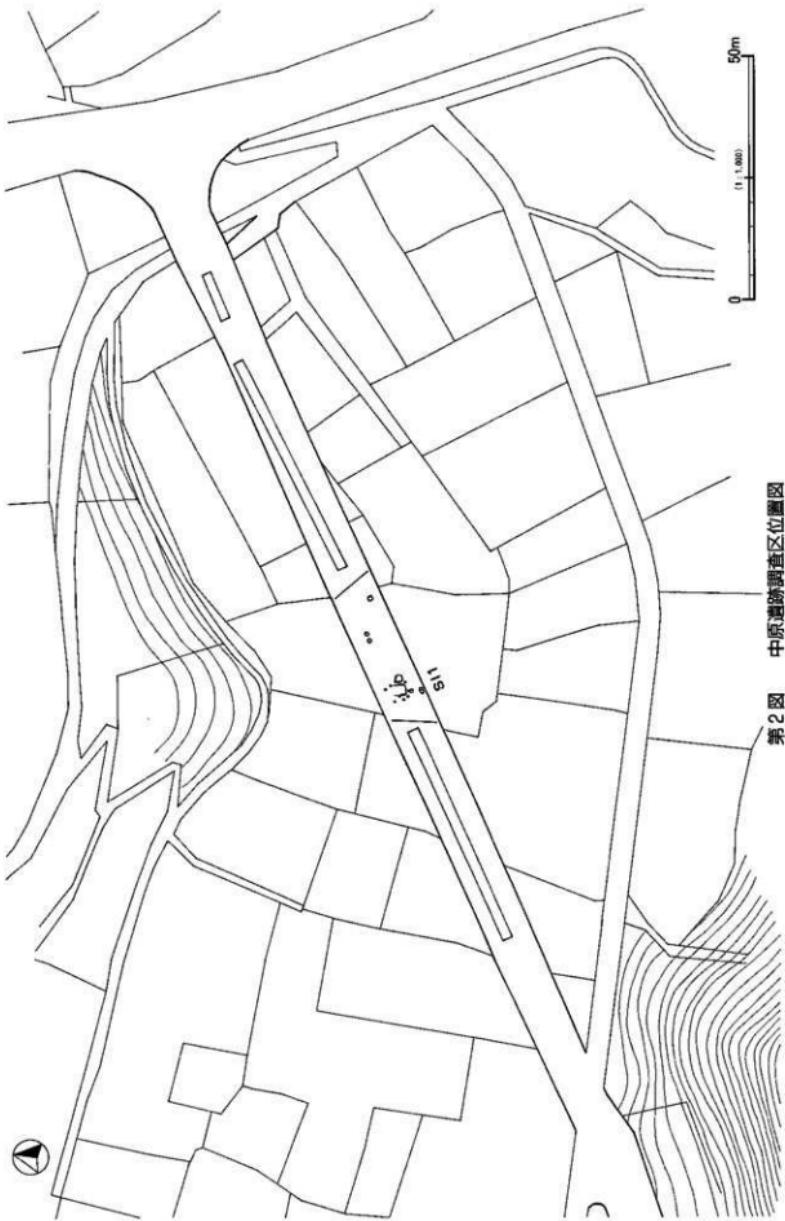
S I 1の東側の土坑は、ローム粒・ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、締りがある土である。

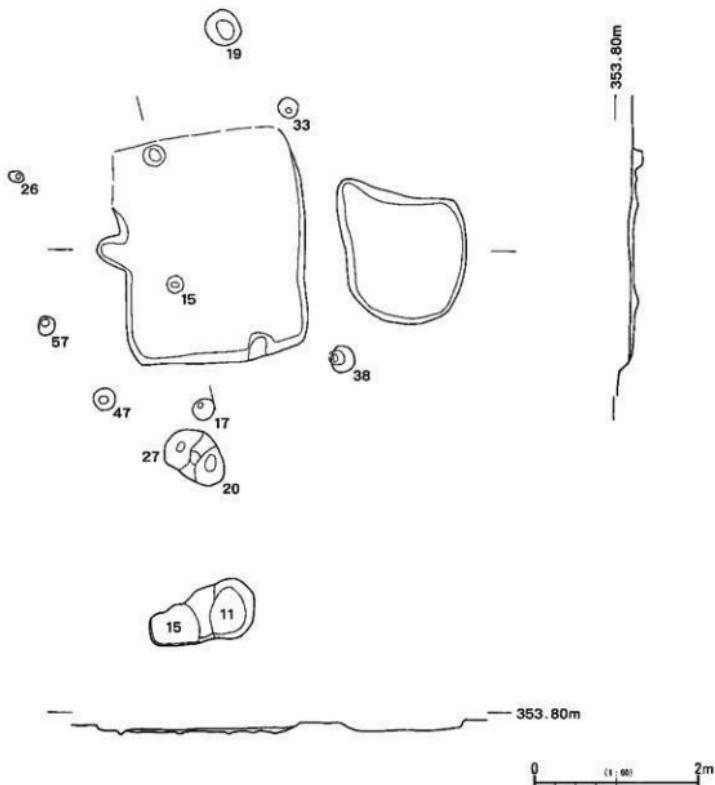
さて、今回確認したS I 1の周囲に存在する小ビットが、いわゆる堅穴外柱穴であるかどうか、若干検討を加えたい。

堅穴外柱穴とは、その名が示す通り、堅穴住居跡の外側にある柱を据えるためのビットであり、概ね堅穴の外1m程度までに見られるという。桐生直彦氏の研究により「羅目」の目を見た遺構の1つであるが、山梨県内でも2005年の段階で6例が集成されている。さて、このS I 1の堅穴外柱穴に関しても、非常にロームを多く含む土であったため、当初ビットか否か不明に感じていたが、水を撒くことにより遺構と認識したものである。明らかに締りのない土のビットが1つあったが、報

中原道路調査区位置図

第2図





第3図 S11実測図

告からは除外してある。ここで、1点気になるのは、南東隅のピットが外向きに掘られていることである。一般的にこのような掘り型であれば、柱は外側に向けて立てられていたと想定できよう。竪穴外の柱穴が竪穴に対して整然と並んでいれば、竪穴との関連性を想定しやすいが、今回の調査のように上部が大きく削平されている場合、相関性を高める情報が少ないのが実情である。よって、調査担当であっても、「明らかに竪穴と無関係なピットは排除」することができないのが、悩みの種である。ともかく、関連性があるものとして、とりあえず報告しておきたい。

参考文献

桐生直彦 2005 『竪をもつ竪穴建物跡の研究』 六一書房

III. 白戸遺跡

本遺跡も今回の調査が初めての調査である。東側に展開する北原遺跡では、畠から出土した土器などが境川村教育委員会に寄贈されていることから、弥生時代後期～古墳時代にかけての集落と推測され、平成10年に古墳時代前期の住居跡1軒から多数の土器が発見されていることから、白戸遺跡も表探資料を見る限りほぼ同様であろうと想定していた。

かつてこの地には、境川小学校の分校である寺尾分校が存在しているが、平成7年に閉校になっている。この寺尾分校は、丘陵の先端部に築かれており、分校の西側は斜面となっており、遺跡は東側に展開していると想定している。周囲の畠から僅かに土器が現在も採集されるが、遺構は希薄と考えられてきた。今回の調査に際し住民からは、以前畠が陥没したという話を聞くことができたため、地下式坑のような遺構が存在した可能性があると思われる。

今回は分校の北側では、確認面が真上であり遺構・遺物はまったく確認できなかったが、南側の道路拡幅部分ではローム層が確認でき、遺物がトレンチ内の表土から出土した。ローム層における基本層序は、境川地区でこれまで確認されているものと同様である。Ⅲ層はソフトローム層、V層は暗褐色ローム層（黒色帶）、VI層は黄褐色硬質ローム層、VII層は暗褐色ローム層であった。尚、IV層の黄褐色硬質ローム層は確認できなかった。

今回の調査では、3m道路の拡幅箇所で、溝状遺構1を確認した。出土した遺物は、土器371点4,760g、黒曜石2点5gであった。

SH1（第5～8図、PL1）

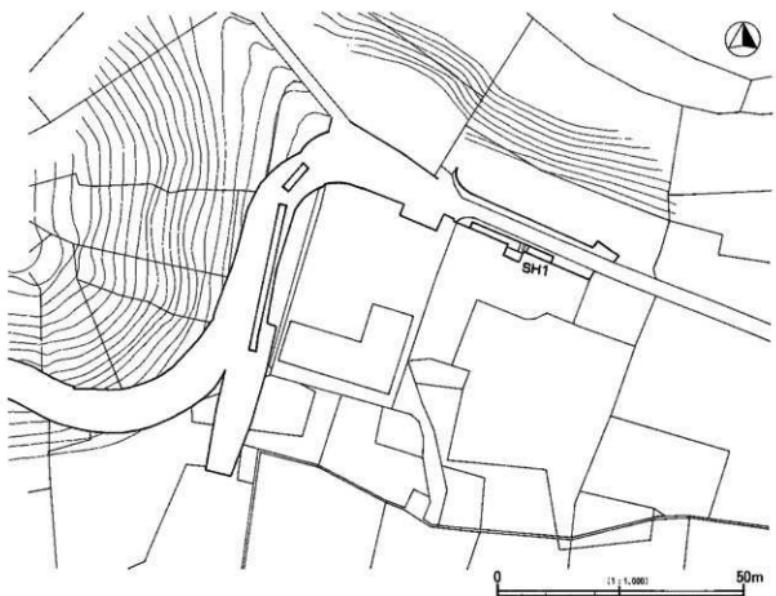
道路拡幅箇所という狭小である調査区で、幅1.7～2.1m、長さ2mで、ほぼ南北方向に延びる溝状遺構を確認した。表土は20～30cm程度で、表上から底面までの深さは1.3m程を測る。両縁際に浅いテラス状の平坦面が見られる。

遺物は土器が大半であるが、石（礫）や黒曜石も少量出土している。出土した遺物は土器327点4,407g、石（礫）19点2,454g、黒曜石2点5gが出土した。土器の大半は中央より西側に比較的多く見られ、その大半は第2層に集中する傾向が見られる。さらに、出土状態を観察する限り、ほぼ同じ高さで接合関係が認められるため、溝がある程度埋没した段階で、土器の破損行為が行われたものと考えておきたい。

土器は明確な年代の指標となるものが少ないが、高杯（15・16）等から、『山梨県史』編年のⅢ期、4世紀後葉～5世紀前葉頃と思われる。ただ、土師器の甌（23）が出土しており、少し後出の様相も見られる。

尚、調査終了後、畠への進入路がSH1付近に建設されることが判明し、進入路の掘削時に人力で覆土（主に第2層）の調査を実施し、遺物を回収しているため、出土状態が記録できなかった遺物（11、12、15、16、21、23）があることを、付記しておく。

石器は3点出土していて、1・2はSH1出土である。1はホルンフェルス製の打製石斧で70g、磨耗が著しい。2は閃緑岩製の磨石で346g、3は表土出土の閃緑岩製の磨石で118gである。



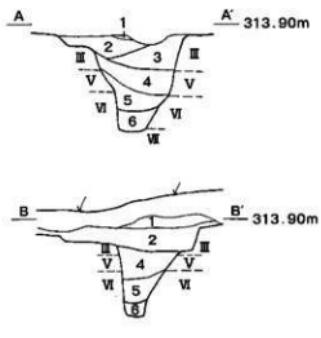
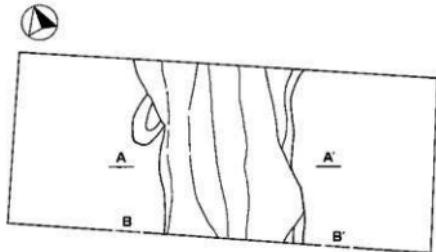
第4図 白戸遺跡調査区位置図

今回の調査で確認した遺構は、溝状遺構1条だけであるが、いくつか興味深い情報が得られたので、列記しておく。

まず、この溝状遺構の性格は、結論から言えば方形周溝墓の一部であると考えている。根拠は下記に列挙する事実であるが、溝状遺構の調査状況は、これまで境川地区で調査されている方形周溝墓と類似しているからに他ならない。

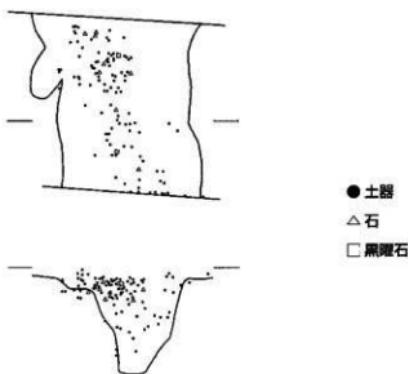
さて、まず第1に、覆土の最下層である6層が特徴的である。この土はソフト・ハードローム層を多く含む土であるが、暗褐色土も混入しており、土器はほとんど含まれていないもの皆無ではない状況であり、地山ではないことは確実である。このことはすでに西原遺跡の発掘調査報告書で指摘しており、今回もまさに西原遺跡と同様であった。つまり、この6層を取り除いた段階は、住居跡の掘り型のように凹凸が見られる状態であり、敢えてローム質の土を敷き詰めて溝の底部を平坦にした、いわゆる貼底と考えられる。西原遺跡の調査以降、県内の事例を注目しているが、今のところ管見する限り無いようである。SH1の溝は、テラス部分を除くと、幅1m程度、深さ1m程度である。これまでの県内の調査例（小型の方形周溝墓）と幅と深さの相関性を比較すると、SH1は幅が狭くて深いように感じられる。深さについては、当時の地表面で比較できないため難しいが、今後留意することとしたい。

次に、今回の調査で完形に近い高壙が2点（15・16）出土している。特に15は、口縁と脚部の一部を欠損している。一方、16は口縁の一部を残し、大半を欠損している。この欠損は、人為的に打

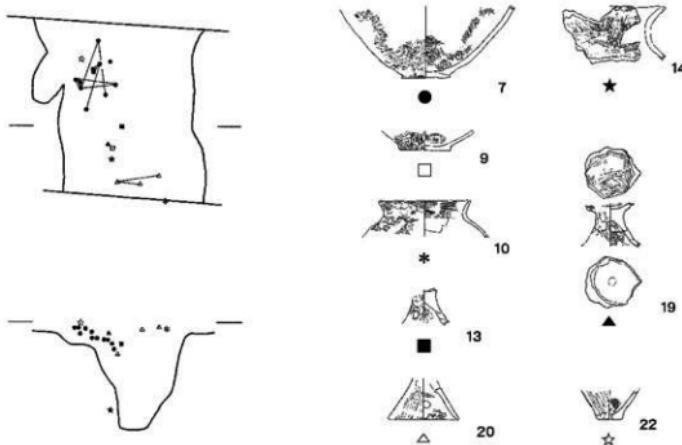
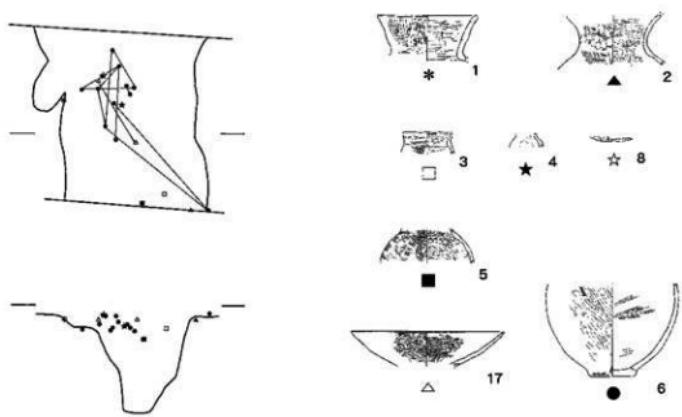


No.	色調	標	埋入物
1	黒褐色	○	□
2	暗赤褐色	○	□
3	暗黄褐色	△	○
4	暗褐色	△	○
5	褐色	△	○
6	暗褐色	○	○

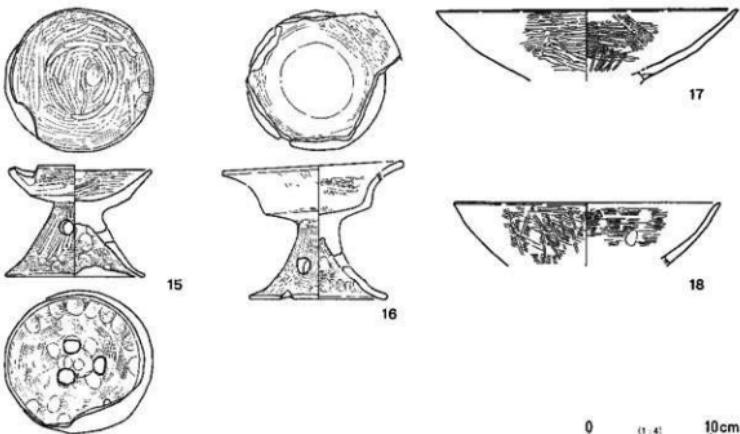
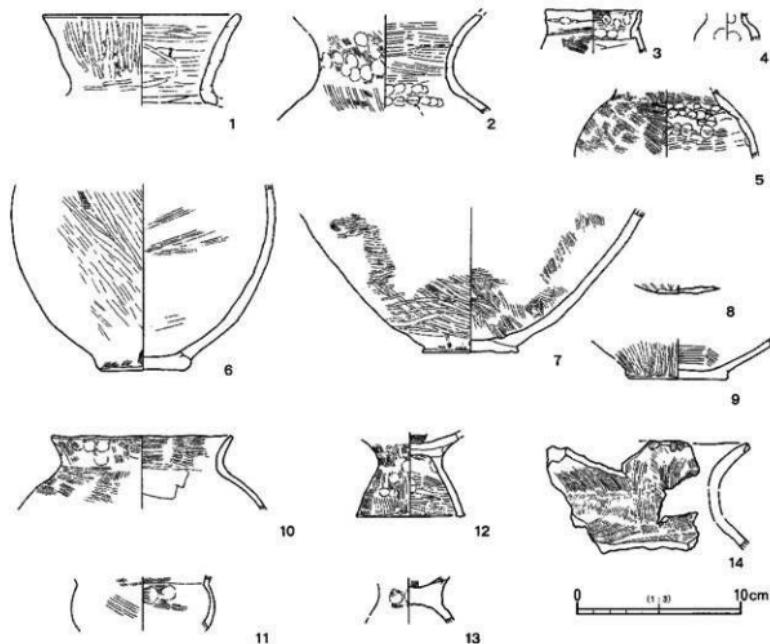
0 (1:60) 2m



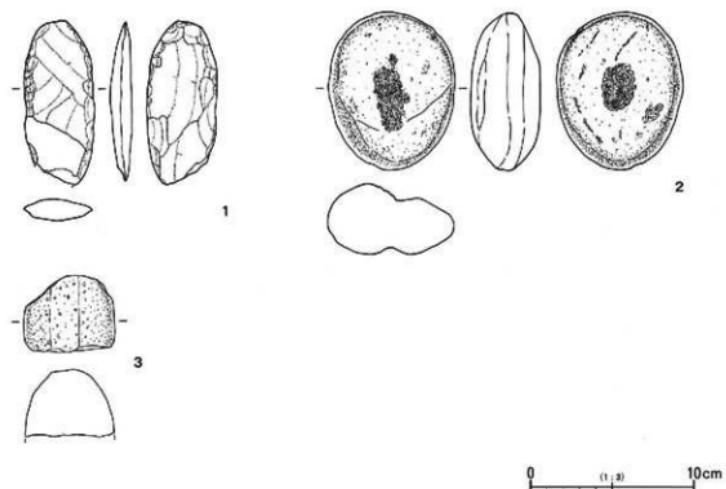
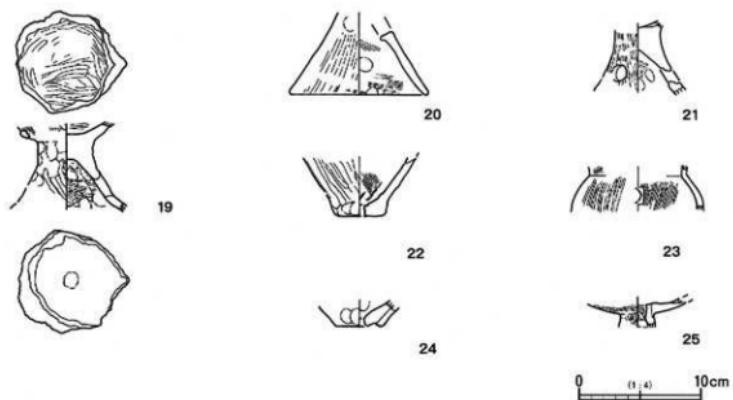
第5図 SH1実測図



第6図 SH1土器個体別分布図



第7図 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

ち欠いたものと考えている。県内では、底部及び胴部穿孔は周知されているが、口縁の打ち欠きはまだ周知されていない。西原遺跡で「対になる土器」の口縁が同じように打ち欠かれていることから、その可能性を指摘したが、今回高坏の口縁が人為的に打ち欠いていると想定されることは、今後、方形周溝裏の葬儀禮を考える上で、注目すべきだと考えている。

今回確認されたSH1は、丘陵の平坦面の先端に立地するが、一般的に県内の方形周溝墓や初期の古墳は丘陵の先端部に構築される傾向にあるという指摘に合致する。しかしながら、本遺跡の北側には間門川の支流を挟んで丘陵が拡がっているが、この丘陵部の境川町分には方形周溝墓は確認されていない。ただ、この丘陵の先端部である甲府市（旧中道町）の宮下（朝日遺跡）では、かつて大形の弥生時代後期の壺が出土しており、恐らく方形周溝墓が存在すると見なしていいのではなかろうか。また、平成19年には、馬場・前付遺跡で実施した試掘調査で、方形周溝墓を複数確認している。概ね、寺尾地区の丘陵の先端には、方形周溝墓が存在していると考えられる。さらに、諏訪尻遺跡、口明遺跡、柳原遺跡、西原遺跡と東側に続く丘陵先端部で、方形周溝墓が確認されている。このように、中道往還の西側に拡がる甲斐風土記の丘一帯の方形周溝墓群に対し、東側の丘陵部にも連続と方形周溝墓が拡がっていることが、今回確認できることになる。山梨県の古墳出現期前後の墓制のあり方を考える上で注目されよう。

境川村教育委員会 2002 『西原遺跡・柳原遺跡（2次）』

境川村教育委員会 2004 『天神遺跡（2次）・立石北遺跡（3次）・北原遺跡』

山梨県考古学協会編 1983 『山梨の遺跡』 山梨日日新聞社

第1表 土器観察表

固 定 版 番 号	青 り	追拂	性別	器種	部 位	残存率 (%)	口縁 留溝 深度 (mm)	整 形	胎 燒 色	土 底 層	備 考
7 1	SH1	土師器	女	口縁	底部	(16.4) — —	(外)ナデ・ハケ→ハラミガキ、ナデ (内)ナデ・ハケか→ハラミガキ、ナデ	青、白、黒 青通 明無色～暗褐色			
7 2	SH1	土師器	女	口縁	底部	— —	(9.5)ハケ・指留痕・ハラミガキ (外)ハケ・指留痕・ハラミガキ	やや青、白、黒・小石(3~4mm) 青通 明褐色～明褐色			
7 3	SH1	土師器	女	口縁～底部	— — —	(8.0) — —	(外)ナデ・ハケ (内)ハケ・ナデ・指留痕・ハラミガキ	青、白 青通 明褐色			
7 4	SH1	土師器	ミニチュア壺	腹部～肩部	— — —	— — —	(外)ナデ・指留痕 (内)ナデ(ミコ)・指留痕	やや青、白 青通 (外)青褐色(内)明褐色			
7 5	SH1	土師器	女	底部	底部	— — —	(外)ハケ (内)ハケ・指留痕	青、白 青通 暗褐色～黒褐色			
7 6	SH1	土師器	女	底部～底部	底部	— — —	(外)ハケ→ハラミガキ (内)ハケ(糊い)→ナデか	青、白、黒・赤・小石(2mm) 青通 明茶褐色			
7 7	SH1	土師器	女	底部	底部	— (8.0)	(外)ハケ→ハラミガキ (内)ハケ・指留痕 (外)ナデか	やや青、白、黒 青通 明褐色			
7 8	SH1	土師器	女	底部	底部	— 3.0	(外)ハケ(ケズリ状)→ハラミガキ(部分的) (内)ハケナデか (外)ハケケズリ状→ハラミガキ	青、白 青通 明褐色			

固 形 類 型 り	遺 構	輪 列	器 種	部 位	残 存 率 (%)	口 括 弧 度 度 度 (mm)	整 形	胎 殼 色	土 成 層	備 考
7.9 SH1 土師器 豆	底	底部光形	-	(例)ハケ→ヘラミガキ (内)ハケ(無い)→ヘラミテ(部分的) (外)ラクゼリカ→ヘラミガキ	密、白 普通 (外)明褐色~明褐色 (内)明褐色					
7.10 SH1 土師器 豆	口縁~腹部	-	(例)ハケ→指屈痕 (内)ハケ→ヘラミテ	(16.0) -	やや粗、白・小石(5mm) 普通 明褐色					
7.11 SH1 土師器 豆	腹部~底部	-	(例)ナダ・ハケ (内)ハケ→指屈痕・ナダ	-	やや粗、白 普通 (外)茶褐色 (内)茶褐色~茶褐色					
7.12 SH1 土師器 台付壺	脚	脚部 33	-	(内)ハケ (内)ハケ→指屈痕 (9.0)	やや粗、白・金(黄) 普通 (外)褐色 (内)明褐色~黒褐色					
7.13 SH1 土師器 台付壺	脚	-	-	(内)ハケ (内)ハケ→ナダ・指屈痕	やや粗、白・黒・金 普通 褐褐色~褐褐色					
7.14 SH1 土師器 豆	脚	-	-	(例)ハケ (内)ハケ・ナダ	やや粗、白・黒・小石(1~2mm) 普通 暗茶褐色					
7.15 SH1 土師器 高杯	口~真	ほぼ完全	11.9 9.2 11.6	(外)ハケ→ナダ→ヘラミガキ (内)ハケ→ヘラミガキ (内)ハケ・指屈痕	やや粗、白・黒・金(發)・砂(少) 普通 明褐色	3孔 口縁・脚打ち穴				
7.16 SH1 土師器 高杯	口~真	口縁 10 脚・脚部 底部光形	15.3 11.4 11.6	(例)ハケ→ナダ→ヘラミガキ (内)ハラミガキ(ヨコ) (内)ハケ(無い)→ヘラミガキ	やや粗、白・小石(2~2.5mm) 普通 (外)明褐色 (内)明褐色~明褐色	3孔 口縁・脚打ち穴大さ 脚打ち穴少				
7.17 SF1 土師器 高杯	口~肩	10	(24.8) -	(例)ハラミガキ(ヨコ) (内)ハケ(無い)→ヘラミガキ	密、白・黒・金 普通 (外)茶褐色 (内)明褐色					
7.18 SH1 土師器 高杯	口~肩	10	(22.0) -	(例)ハケ→ヘラミガキ(部分的) (内)ハケ(無い)ヨコ・指屈痕	密、白 普通 明褐色~明褐色					
8.19 SH1 上部器 高杯	脚	-	-	(例)ハケ→ヘラミガキ (内)ハラミガキ・ハケ→ヘラミガキ	やや粗、白・赤・小石(5~7mm) 普通 (外)褐褐色~褐色 (内)黑褐色、褐褐色	打ち欠き				
8.20 SH1 土師器 高杯	脚	25	- (11.6)	(例)ハケ→ヘラミガキ (内)ハケ・指屈痕	やや粗、白・黒・小石(1~3mm) 普通 (外)褐褐色~褐褐色 (内)褐褐色	3孔				
8.21 SH1 上部器 高杯	脚	-	-	(例)ハラミガキ (例)ナダ (内)ハケ→指屈痕	やや粗、白・黒 普通 褐褐色~明褐色	3孔				
8.22 SH1 土師器 豆	底部~底部	底部光形	-	(例)ハケ→ヘラミガキ (内)ハケ・ナダ (内)ナダ	密、白・黒 普通 切削色	孔径 0.8mm×0.9mm				
8.23 SH1 土師器 豆	底部~脚部	-	-	(例)ナダ→ヘラミガキ (内)ナダ→ヘラミガキ	密、白・黒・金 普通 (外)褐褐色 (内)灰褐色	孔有り(1mm以上)				
8.24 表土 上部器 豆	脚部~底部	底部 25	(4.0)	(例)ナダ (内)ナダ・指屈痕 (内)ナダ・指屈痕	やや粗、白・黒 普通 切削色	底部崩壊(焼成)				
8.25 表土 土師器 台付	体~脚	-	-	(例)ハラミガキ (内)ハラミガキ・ヘラミズリ	密、赤・砂(無) 普通 明褐色~明褐色					
8.26 SH1 横文 深鉢	脚部	-	-	-	やや粗、金・黒 普通 明褐色	押型文(椎円)				
8.27 SH1 横文 深鉢	脚部	-	-	-	やや粗、白・金・黒・砂 普通 切削色	RL無輪輪文・ 鉢底蓋Z3式				
8.28 SH1 横文 深鉢	脚部	-	-	-	やや粗、白・黒・赤・砂 普通 (外)茶褐色 (内)褐色	RLの横筋輪文・ 深鉢b式				
8.29 表土 横文 深鉢	脚部	-	-	-	やや粗、白・黒・赤・小石(1mm)・砂 普通 明茶褐色	五面ヶ台上式				



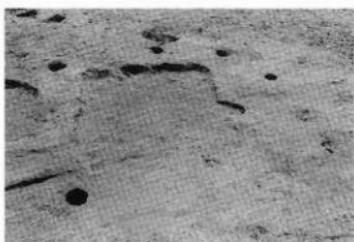
中原遺跡遠景 (南より)



中原遺跡近景 (東より)



中原遺跡調査区全景 (西より)



中原遺跡 SH1 (北より)



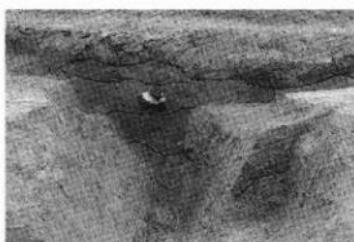
白戸遺跡近景 (東より)



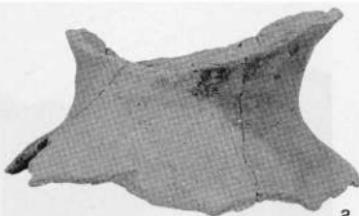
白戸遺跡 SH1 (北より)



白戸遺跡 SH1 (西より)



白戸遺跡 SH1



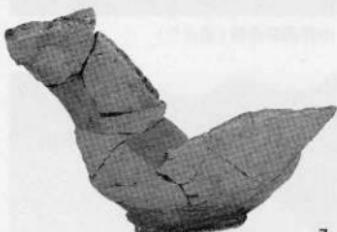
2



5



6



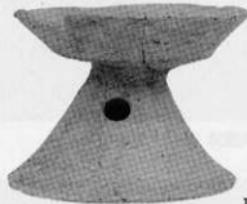
7



8



12



15



16



19



20



21



22

報告書抄録

ふりがな	なかはら・しらといせき							
書名	中原・白戸遺跡							
副書名	県営畠地帯総合整備事業守尾地区発掘調査報告書							
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	野崎進							
編集機関	笛吹市教育委員会							
所在地	〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部809-1 TEL 055-261-3342							
発行年月日	西暦2008年3月28日							
所取遺跡名	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
中原遺跡	山梨県笛吹市境川町 寺尾字中原	(19325)	130	35度 35分 07秒	138度 36分 26秒	20020918～ 20020921	242	幹線道路建設工事
白戸遺跡	山梨県笛吹市境川町 寺尾字白戸	(19325)	126	35度 35分 23秒	138度 35分 55秒	20041022～ 20041101	45	支線1号道路建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中原遺跡	集落跡	平安時代	住居跡	1				
白戸遺跡	集落跡	古墳時代	方形周溝墓	1	土師器、石器			

笛吹市文化財調査報告書 第7集

中原・白戸遺跡

発行日 2008年3月28日

編集・発行 笛吹市教育委員会

印刷 刷 (有)ナカガワ
山梨県笛吹市御坂町成田2811

The Report of
Archaeological Research of NAKAHARA and SHIRATO Sites

An Archaeological Survey prior to the Prefecture-run Integrated Rural Improvement
of TERAO region, Sakaigawa.

March, 2008

Agricultural Department, Yamanashi Prefectural
Development Office of Kyoto Area
Fuefuki City Board of Education